



Title	青年期における恋愛関係崩壊による心理的变化に影響する要因について
Author(s)	石本, 奈都美; 今川, 民雄
Citation	対人社会心理学研究. 2003, 3, p. 39-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8722
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

青年期における恋愛関係崩壊による 心理的变化に影響する要因について¹⁾²⁾

石本 奈都美(医療法人 相川病院)

今川 民雄(北星学園大学社会福祉学部)

恋愛関係の崩壊後に生じる心理的变化に影響を及ぼすと考えられる3種類の要因について検討するために、質問紙を実施した。本研究で取り上げられた要因は、Harvey(1995)が提起した仮定に基づいている。352名の大学生の被調査者のうち、失恋経験を持つ196名が分析の対象とされた。失恋にいたる先行要因のうち、原因についてははっきり述べられなかった被調査者が、はっきり原因を述べているものよりも否定的な心理的变化をしていた。他方、Duck(1982)の関係崩壊モデルの4つの段階を経験している者は、肯定的な心理的变化を経験していた。さらに、友人から得たサポートは心理的变化と関連がなかったが、「話をしたい」と思うことが肯定的変化に、また「話したくない」と思うことが否定的変化に関連していた。

キーワード:恋愛関係、関係崩壊、青年期、心理的变化

問題と目的

大坊(1988)が指摘するように、異性間の恋愛関係の過程を明らかにするためには、時系列的な観点を持ちながら、恋愛を多面的に把握することが必要となる。しかし、これまでの恋愛の過程の研究においては、失恋後の落ち込みやそれからの立ち直りの過程についての関心は高いものではなく、本邦でも失恋後の経験そのものに焦点を合わせた研究は、宮下・臼井・内藤(1991)、和田(2000)、石本・今川(2001)など少数であった。

ところで、Sprecher & Fehr(1998)は、親密な関係の崩壊に関する研究の注目点は、次の3つであると述べている。第1に何が関係を崩壊に至らせるのか(すなわち、なぜある関係は存続し、ある関係は終結を迎えるのか)、第2に関係が崩壊に至るプロセスはいなくなるのか、第3に関係崩壊後、人はどのように反応し、対処するのか、である。本研究は、この第3の点に注目したものである。

さて、「失恋からの立ち直り」は、単に恋愛関係が起こる前の状態に戻ることを意味するのではなく、ポジティブ・ネガティブ両面を含めて、それまでの対象に対する愛着をあきらめ、新しい対象の発見と、それとの結合に基づく新しい心のあり方を見いだそうとする過程であるといえよう。宮下ら(1991)は、失恋後の心理的变化をとりあげ、肯定的変化と否定的変化の2因子を抽出し、それぞれの関係要因を検討している。それによれば、「肯定的変化」に影響する最大の先行要因は「失恋した年齢」であり、以下「恋愛継続期間」「現在の年齢」「失恋の原因」の順となった。また「否定的変化」の最大の先行要因は「恋愛継続期間」であり、以下「失恋の原因」「現在の年齢」「失恋した年齢」の順で影響していた。このことは、恋愛関係が崩壊に至る過程における内的外的先行要因が、立ち直りに過程で生じる心理的变化に影響を与えることを示している。

石本・今川(2001)は、立ち直り過程で生ずる経験の構造を明らかにし、そうした経験に影響する先行要因の影響について検討したが、失恋経験が本人にどのような心理的变化をもたらすかについては、触れていなかった。しかし、「立ち直り」についての検討をするにあたって、その過程で生ずる心理的变化を視野に入れることは、立ち直りの意味を考察するにあたって不可欠のことと考えられる。

さて、失恋を対象喪失として捉えた場合、その立ち直りに関して Harvey(1995)は次のように主張している。彼によれば対象の喪失は嘆き体験をもたらすが、その後喪失と向き合う段階になったとき、立ち直りに効果的なのが、重大な喪失についての解釈(account)をふくらませることと、喪失について親しい他者に打ち明ける(告白; confiding)ことであると述べている。ここで解釈とは、人々との人生の重要な側面について人々を作る物語をさす。解釈をすることは喪失によってもたらされた問題に立ち向かう活動をしていることになり、反省、分析、イメージの中の移動などを通じて情緒的な変化をもたらすことが可能になるのである。また告白は、自分の見方を確保するために一番親しい友人に自分の解釈の一部を伝えたり、ある見方で自分を示したり、経験を分かち合ったりすることを意味している。告白を含む社会的相互作用過程は、そこで話された内容がどのようなものであれ癒しの過程になりうるといえよう。

さらに Duck(1982)は、関係崩壊過程に失われた関係を回顧し、関係を清算するための思い出の埋葬段階を加えてモデル化している。第一は、**内的取り組みの段階**である。この段階では、パートナーの行動に個人的に焦点を合わせ、パートナーの役割遂行の十分さを査定し、関係を続けていることのネガティブ面を評価し、関係を止めることによって生じるコストや他の関係のポジティブ面を査定することとなる。第2段階は、**関係の段階**である。この段

階では、パートナーと対決し、「われわれの関係」について話し合うことになる。その結果、関係の修復や和解に至ることもありうる。第三段階は**社会的段階**である。パートナーと、関係崩壊後についての話し合いが始まり、相手を非難する物語を作り上げたり、自らの社会的ネットワークの中で、自らの関係崩壊について話し始める段階である。場合によっては、仲間からの介入を求めることにもなる。第4段階は**思い出の埋葬段階**である。自分版の関係崩壊物語を公にすることを通じて、新たな関係へと向かうことになる。

Duck(1982)の提起したこの4つの段階は、必ずこの順序で関係崩壊が進んでいくことを主張するものではない。しかし、4つの段階のそれぞれを経験してゆくことが、Harvey(1995)のいうところの解釈をより容易にするということが予想される。そして、思い出の埋葬段階に至る前に、3つの段階を踏んでいることで容易に解釈が進めば、肯定的な心理的变化を示しやすいことが予想される。というのも、例えば別れを切り出す側にとっては、関係崩壊の内的取り組みの段階において、関係解消に対するコストについて査定を行っているが、切り出される側にとっては、関係的段階、社会的段階に至って初めて相手の役割や関係の継続・崩壊に関する査定を始めるといったギャップがあるからである。切り出す側が『最後通告』としての対決ではなく、『話し合い』として共に段階をたどっていくとならなければ、少なくとも当事者のうちどちらかは、関係崩壊後のコスト査定を崩壊前に行わないままになってしまうこともありうる。少なくともコスト査定が関係崩壊前に行われていれば、思い出の埋葬段階における『解釈』をより容易にすることが予想される。石本・今川(2001)において、「別れを切り出した側」と「切り出された側」という立場の違いが、別れ後の感情や行動にあまり関わりを持たなかったのは、上記のような事情が含まれていたためと考えられ、単にどちらが別れを切り出したかということよりは、Duck(1982)のいう関係の崩壊段階をどう経験していったかといった観点からの検討が必要であることが示唆されていた。

ところで、対象喪失を経験した本人の周囲にいる人間には、一体何が出来るだろうか。警視庁統計書(1974)によると、自殺の主要動機について15~24歳を合わせると、失恋・精神疾患・厭世が群を抜いており、そのほとんどを占めている。少なくとも青年期の若者にとって失恋という経験は、自分を成長させるための重要な契機の一つといえるだろうが、これを乗り越えるための何らかの周囲のサポートを必要としているものも多いことを、この数字はあらわしていると思ふことができる。

そこで、本研究の目的であるが、1)宮下ら(1991)と同様に、立ち直り過程で生ずる心理的变化に対する先行要因

の影響を検討するとともに、2)Duck(1982)の関係崩壊モデルにおける各段階を経験することが立ち直り過程における肯定的心理的变化に結びつくという仮説を検討する。さらに、3)友人などから得られる他者からのサポートが立ち直り過程における心理的变化に肯定的影響を及ぼすという仮説についても検討する。そして最後に4)Harvey(1995)が告白の重要性を指摘していることから、丸山・今川(2001,2002)の自己開示がストレス反応の低減をもたらすという知見も踏まえ、周りの人々への失恋経験についての自己開示が心理的变化に肯定的影響をもたらすという仮説についても検討を加える。

方法

質問紙の構成

まず、宮下ら(1991)との比較検討のため、「学年」、「性別」、「失恋・恋人との別れの経験の有無」に続いて、失恋経験のあるものに「別れの原因」(石本・今川(2001)において使用したもののうち、ケース数の少なかったものを除き、その他を含めた8カテゴリ)「恋愛段階」(石本・今川(2001)で使用したものと同一項目)「別れてからの時間」、「交際期間」を尋ねた。さらにDuck(1982)の「関係崩壊モデル」の心理的变化に対する影響を明らかにするため、Duck(1982)の各段階の経験について6項目(Table 4参照)の質問によって尋ねた。また失恋後における「失恋経験の自己開示に関して「誰かに聞いてほしいと思ったか」「誰にも話したくないと思ったか」「一緒にいたいと思ったか」「一人で過ごしたいと思ったか」「話を聞いてもらったか」「誰かと一緒にいるときが多かったか」の6項目、またどのようなサポートを受けたかについて「周りの人が何かしてくれたか」と、してくれたことについて自由記述で尋ねた。本研究の従属変数である「心理的变化」については宮下ら(1991)からの12項目(Table 1参照)を用いた。そのほか「別れの後に経験した感情や行動」「孤独感」についても質問したが、本研究では取り上げない。

調査対象者

調査対象者は、国立H大学の学生352名であった。調査は留め置き法で行った。数名から数十名で構成される専攻グループのゼミナールの時間に記入してもらい、1週間後に回収した。回答者数は352名、うち失恋経験なしが54名(15%)、欠損ありが102名であったが、欠損ありのデータでも、使用できるものは使用した為、一部の分析においてはケース数が229となっている。性別割合は、女性160(69.9%)、男性69(30.1%)であった。

結果

1. 心理的变化の構造

まず、失恋・別れのあとに経験する心理的状態の変化

(以後「心理的变化」とする)を尋ねた 12 項目について主因子法による因子分析をおこなった。バリマックス回転を試みた結果が Table 1 に示してある。固有値の減衰状況および解釈可能性から判断して、2 因子とした。

第1因子は、「相手の気持ちや置かれている状況を考えるようになった」、「今までより他人の気持ちを考えるようになった」など、別れを肯定的に捉えている項目に高い負荷量を示したことから、「肯定的変化因子」とした。第2因子は、「もう人を好きになれない」、「もう恋愛をしたくない」など、恋したことを後悔し、否定的な心理状態になっている項目となっているため、「否定的変化因子」とした。この因子分析結果に基づき、被験者ごとに因子得点を求め、「肯定的変化因子」と「否定的変化因子」の得点とした。

Table 1 心理的变化因子分析(直交回転、バリマックス法)

変数名	因子 1	因子 2	共通性
相手のこと考える	0.424	0.151	0.202
他人の気持ち考える	0.660	0.101	0.445
優しい人間に	0.614	0.079	0.384
よい人生経験	0.397	-0.212	0.202
現実を冷静に	0.394	-0.102	0.166
視野が広がった	0.430	-0.109	0.197
自分の気持ちに正直に	0.558	-0.108	0.323
自分を向上させたい	0.466	0.164	0.244
もう好きになれない	0.015	0.686	0.471
もう恋愛したくない	0.006	0.845	0.714
異性を信じられない	0.050	0.510	0.262
自分に自信がない	0.106	0.506	0.267
因子負荷量の2乗和	2.031	1.845	
因子の寄与率(%)	16.927	15.379	
累積寄与率(%)	16.927	32.305	

2. 心理的变化に及ぼす先行要因の効果

この 2 つの因子に、失恋にいたる先行要因が影響を与えているかどうかについて検討するため、「性別」「恋愛段階」「別れの原因」「交際期間」「別れてからの期間」のそれぞれを独立変数とする分散分析をおこなった。

Table 2 には、それぞれの分散分析の自由度、F値およびF値の出現確率が、肯定的変化、否定的変化別に示してある。肯定的変化についてはいずれの主効果も有意ではなかった。否定的変化において、原因の主効果についてのみ1%水準で有意差が認められた。多重比較の結果、「その他」が「1 倦怠」「4 片思い」「6 物理的距離」「7 周囲の環境の違い」と「8 その他」より有意に大きかった。「倦怠・片思い・物理的距離・周囲の環境の違い」を原因として挙げた人に比べ、「その他」を原因とした人は否定的変化を生じやすいといえる。

Table 2 心理的变化に及ぼす先行要因の効果(分散分析)

	自由度	心理的变化	
		肯定的変化	否定的変化
性別	1, 227	0.506	3.099
段階	2, 226	0.607	0.524
原因	6, 218	0.484	3.629**
交際期間	2, 226	1.152	1.158
別後期間	2, 226	2.660	0.559

** $p < .01$

二つの因子の因子得点を基準変数、先行要因を説明変数とした数量化理論第 2 類による解析も行った(Table 3)が、やはり原因のみが否定的変化に対してのみ影響を与えているという、分散分析と同様の傾向を示した。

Table 3 数量化理論第 2 類による分析結果

基準変数	肯定的変化因子		否定的変化因子	
	単相関	偏相関	単相関	偏相関
性別	0.040	0.034	0.118	0.078
原因	0.107	0.103	0.287	0.288**
段階	-0.006	0.071	-0.037	0.047
交際期間	0.111	0.083	0.101	0.115
別離期間	0.125	0.127	0.071	0.075

重相関係数(2乗) 0.208 (0.043) 0.343 (0.118)

** $p < .01$

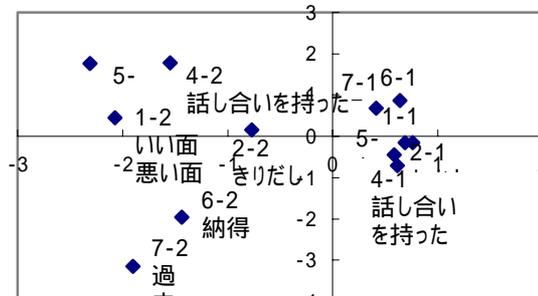


Figure 1 関係の崩壊: 数量化理論 2 類

3. Duck のモデルと心理的变化

1) 関係の崩壊段階の構造について まず Duck(1982) のによる関係の崩壊段階のモデルが、実際の崩壊段階の経験の構造と対応しているかどうか確かめるため、数量化理論第 2 類を行った。結果は Table 4 に示してある。

寄与率および p 値から、崩壊段階は成分 1 と成分 2 の二つの軸で説明できると判断した。そこでこの二つの軸の値に基づいてプロットしたものが Figure 1 である。第 1 軸は、崩壊モデルの各段階の行動を経験しているかいないかを分けている軸と解釈できる。プラスの方向が経験している、マイナスの方向が経験していないという反応が集まっていることがわかる。

Table 4 数量化理論 類

項目 - カテゴリ	成分 1	成分 2	成分 3	成分 4
1 いい面悪い面	0.686	-0.148	-0.288	1.073
2 別れ切り出し	0.763	-0.158	2.258	0.226
3 話し合い	0.613	-0.707	-0.315	-0.631
4 相談した	0.582	0.444	-0.143	-0.259
5 納得した	0.639	0.873	0.074	-0.714
6 過去のことだ	0.410	0.681	-0.230	0.106
固有値	0.272	0.209	0.157	0.137
寄与率	27.244	20.859	15.661	13.673
累積寄与率	27.244	48.103	63.764	77.436
カイ2乗値	293.563	215.926	157.213	135.702
(自由度)	(178)	(176)	(174)	(172)
p値	0.000	0.022	0.814	0.981

各項目経験率はほぼ第 軸に対応しており、プラスの方向にあるほど経験率が高く、マイナスの方向になるほど低くなっている。ただし、経験有り群は比較的かたまってのに対して、経験無し群はばらつきが大きく、崩壊モデルにおける経験が、有無のみでは説明できないことを示唆している。

第 軸についてみると、項目1と2、項目3と4、項目5と6が、経験の程度は違うもののほぼ同じ水準にある。このことから、関係の崩壊段階での経験をしない場合、大きく、項目4と5の「話し合い段階の経験のなさ」、項目6と7の「埋葬段階の経験のなさ」、項目1と2の「崩壊段階の経験のなさ」の3つのグループに分かれるということが示されている。

2) Duck モデルの経験と心理的变化 ここで、各軸の成分値と、肯定的・否定的変化の因子得点の間について、相関係数を算出した (Table 5)。その結果、軸 と第1因子に弱い負の相関、第 軸と第2因子に弱い正の相関が見られた。

Table 5 相関係数の計算と検定 (ピアソンの単相関係数行列)

変数名	肯定的変化	否定的変化
1) 軸	-0.385	0.232
2) 軸	0.059	0.337

さらに検討を加えるため、崩壊段階の各項目について、心理的变化との関連を検討するため、各項目の経験の有無を独立変数とした分散分析を行なった。その結果が Table 6 である。

肯定的変化では項目 1, 3, 4, 5 において主効果が有意であり、項目6においても有意傾向で、項目2のみが有意ではなかった。また否定的変化では、項目5と6のみで主

効果が有意となった。この結果から、関係の崩壊段階の経験の構造は必ずしも Duck (1982) のモデルと一致してはいないが、関係の崩壊段階で、Duck (1982) が示した経験をしているほど肯定的変化を経験しやすいこと、また、「埋葬段階」を経験していないほど否定的変化を経験しやすいことが示されたと言える。

Table 6 崩壊段階と心理的变化

	自由度	肯定的変化 F値	否定的変化 F値
1	1, 168	14.68**	0.04
2	1, 168	0.38	2.09
3	1, 168	7.70**	0.04
4	1, 168	15.11**	0.11
5	1, 167	4.68*	26.19**
6	1, 167	3.32	18.56**

** $p < .01$ * $p < .05$

4. 心理的变化に及ぼすサポートの影響

1) サポートの影響 まず「周りの人は何かしてくれたか」という問いに対する「はい」「いいえ」の応答を独立変数とし、心理的变化を従属変数とした分散分析をおこない、サポートの有無が心理的变化に与える影響を検討した。Table 7 に結果が示してある。

Table 7 サポートの有無と心理的变化

	自由度	F値
肯定的変化	1, 225	19.985**
否定的変化	1, 225	9.999*

** $p < .01$, * $p < .05$

肯定的変化と否定的変化共に1%水準でサポートの有無の主効果が有意であった。肯定的変化ではサポートあり群 ($M=0.204$) < サポートなし群 ($M=-0.229$) で、否定的変化でもサポートあり群 ($M=0.142$) < サポートなし群 ($M=-0.237$) で、いずれもサポートあり群が有意に大きな変化を経験している。サポート経験が肯定的変化とも否定的変化とも関連していることが伺える。心理的变化にはサポートの質がかかわっている可能性が示唆されている。

そこで、具体的なサポート内容の違いが心理的变化に及ぼす影響について検討するため、受けたサポートについての自由記述の回答の内容を6名で分類した。分類カテゴリは、励ましや心配など、相手からの働きかけを受けたと感じている「励まし」、飲みに行ったり遊びに行ったりする「一緒に過ごす」、電話や直接会い相談やその人と話をする「話をする」の3つであった。実際にはこれらのカテゴリのうち複数を経験しているものもいたため、被験者を3つのカテゴリ単独で受けているグループおよび「複数サ

ポートグループ」、カテゴリとするには頻度の少ない「その他」の5つのグループに分けた。

このグループを独立変数とした分散分析をおこなった。結果はTable 8である。

Table 8 サポートグループ別分散分析

	自由度	F値
肯定的変化	1, 227	8.942*
否定的変化	1, 227	0.062

* $p < .05$

その結果、いずれの因子においても、サポートの種類によるグループの主効果は有意ではなかった。サポート内容の違いは、心理的变化には影響を与えとはいえなかった。

2) 失恋の開示経験の心理的变化に対する影響 すでに指摘したように(丸山・今川, 2000, 2001)自己開示がストレス低減に有効であることが指摘されてきた。そこで、「何かしてもらった」とことは別に「別れについての話を他者としたかどうか」が心理的变化に影響するかどうかについて検討する。

まず「誰かに話を聞いてもらった」経験の有無を独立変数とし、心理的变化を従属変数とした分散分析を行った(Table 9 参照)。

Table 9 心理的变化(独立変数 = 自己開示)

	自由度	F値
肯定的変化	4, 127	0.404
否定的変化	4, 127	2.246†

† $p < .10$

その結果、肯定的変化因子において話を聞いてもらったことの主効果が有意ではなく、否定的変化因子においてわずかに有意傾向が示された。

次に、開示欲求に関する質問、「話を聞いて欲しいと思った」「話をしたくないと思った」の経験の有無を独立変数とし、心理的变化への影響を検討するために、それぞれ分散分析を行った(Table 10, 11参照)。

Table 10 心理的变化(独立変数 = 話を聞いて)

	自由度	F値
肯定的変化	1, 227	15.915**
否定的変化	1, 227	0.780

** $p < .01$

「話を聞いてほしい」思いの有無は肯定的変化において主効果が有意であり、話を聞いてほしいと思うことが肯定的変化につながることを示されたが、その気持ちは否定的変化とは関連がなかった。他方、「話をしたくない」気持ちの有無は否定的変化で主効果が有意となった。こちら

の場合は肯定的変化とは関連せず、そうした経験をするとな否定的変化を経験しやすいことが明らかになった。

Table 11 心理的变化(独立変数 = 話したくない)

	自由度	F値
肯定的変化	1, 227	0.001
否定的変化	1, 227	9.719*

* $p < .05$

考察

1. 先行要因が心理的变化に及ぼす影響について

本研究は、Harvey(1995)の、「嘆き体験の後、喪失と向き合う段階になるが、この時、重大な喪失についての解釈をふくらませること、喪失について親しい他者に打ち明けることが効果的である」という提唱に基づいて仮説を立てた。しかし本研究で取り上げた先行要因が「重大な喪失についての解釈を膨らませること」にどのようにかわるのかについては、あらかじめ仮説を立てることはしていなかった。結果としては「性別」「恋愛段階」「別れの原因」「交際期間」「別れてからの期間」のいずれも、関係の崩壊によって経験される心理的变化に影響を及ぼしてはいなかった。

この結果は宮下ら(1991)が、肯定的変化に対し、「失恋した年齢」「恋愛継続期間(本研究における交際期間)」「現在の年齢」「失恋の原因」が影響していたとそれに比べて、大きく異なっているといえよう。心理的变化に関する因子構造はほぼ同一であるといえてよく、失恋という関係崩壊に際して経験される心理的变化に二つの方向があるという点については、かなり安定した特徴であるとみなすことができる。にもかかわらず先行要因の影響について異なった結果が出たことについては、宮下ら(1991)と本研究との間で想起してもらった失恋経験の違いについて指摘することが重要であろう。宮下ら(1991)は被験者に「最も印象に残った失恋」を想起してもらったのに対し、本研究では「最も直近の失恋」を想起してもらっている。「最も印象に残った失恋」が、単に「直近の失恋」よりも強い心理的影響を受けた可能性がある。少なくとも同じように「直近の失恋」について想起させた石本・今川(2001)では、失恋後経験をはかる指標としての「普遍性 - 特殊性」「受容 - 拒否」「否認 - 行動」の軸に交際期間が影響し、また失恋の原因についてはこの3つの軸に加えてさらに「直接 - 間接」の軸にも影響をあたえていたことからすれば、心理的变化の認識が失恋後の経験とどのようにつながるのか、あるいはつながらないのかを明らかにすることが、先行要因と心理的变化との関係の有様を解明する手がかりになると思われる。今後の課題となる。

ところで否定的変化に関しては、失恋の原因において

のみ、ある程度のかかわりが認められた。そこで、分散分析の結果を見てみると、「倦怠」「片思い」「物理的距離」「周囲の環境の違い」などが理由で別れた人に比べて、「その他」を理由としてあげた人は否定的な変化を起しているといえるだろう。前者は、相手から気持ちが離れた状態であったり、自分ではどうすることもできないような外的な要因であるといえる。後者の「その他」について考えてみると、これは自由記述形式であったが、記述してあるほとんどが、「なぜ別れたのかわからない」「いつのまにか別れていた」「連絡が取れなくなった」など、その理由がはっきりしていないと認識している回答であった。これは、失恋後、数日から数年までの開きがあるとはいえ、調査時点までに別れの原因を特定できていないと言うこと、すなわち物語を作るにあたって重要な要因が不明であるということである。失恋後の物語を作る上で納得のいく理由をつけることができないことが、阻害的な要因として働いたと考えられるのではないだろうか。そのため、否定的な心理的变化を経験していることが伺われ、解釈を膨らませることの重要性が示されているといえよう。

2. Duckのモデルと心理的变化について

さて、Duck(1982)による関係崩壊の段階を踏むこと、すなわち、相手との別れについて、関係が崩壊するより前にコストと報酬を査定することによって、別れについての解釈がより容易になり、肯定的変化をおこしやすいとの仮説を立てた。その結果、Duck(1982)は4つの段階のモデルを立てていたが、本研究では3つの段階に分かれることが示された。Duck(1982)のモデルでは、1, 2と3, 4, 5と6の4段階になることが予想されたのだが、いわゆる**関係的段階**に含まれる「相手に別れを告げない」ことと、「話し合いを持たない」ことが同じ段階にならず別れを告げないことと別れを考えないことがひとつのグループ似、また話し合いをしないことと他者に相談しないことがひとつのグループに分かれている。いずれの項目についても経験ありがほぼひとまとまりになっていること、そして経験あるなしの軸が肯定的変化と相関があったことを考え合わせると、Duck(1982)のモデルを経験することが肯定的変化を促すこと、そして、そうした段階は経験するものにとっては関係崩壊の段階は特に分かれておらず一続きのものとして経験されていることが推測される。

他方、Duck(1982)の関係崩壊モデルによる段階を経験しないものは、いくつかのタイプに分かれることが予想されるが、埋葬段階を経験していないことが、否定的変化につながっていることからすれば、他の段階は経験なくとも埋葬段階にいたることの重要性が示されている。ただ、本研究においては、被調査者で、いまだ埋葬段階にいたらないものが否定的変化を意識していて、将来的に埋葬段階にいたることの中で、肯定的変化を経験してゆくと

う可能性もあり、関係崩壊の段階を経験しないことの意味については、更なる検討が必要と考えられる。

3. サポートおよび自己開示と心理的变化

適切なサポートがあることは肯定的変化を起ししやすいという仮説については、サポートが否定的変化にもつながるという結果によって部分的な支持にとどまった。こうした結果がサポートの質にかかっているとの予想のもとに、受けたサポートによってグループわけをしたが、受けたサポートの種類は心理的变化に影響を与えて合いなかった。この点については、「励まし」があったかどうかではなく、「どのような励まし」であったのか、「一緒に過ごし」たかどうかではなく、「どのように過ごしたのか」といったように、サポートされる側の受け取り方をより細かく検討することが考えられる。

しかし、本人がサポートと受け取っていないことでも、サポートとしての機能を果たしている可能性のある出来事もありうる。そこで、Harvey(1995)の提唱する「告白」に立ち戻り、「話をしたい」あるいは「話をした」ことの効果について確かめてみた。その結果、「話を聞いてもらった」あるいは「聞いてもらわなかった」ことが肯定的変化や否定的変化にかかわるのではなく、「聞いてほしいと思う」ことが肯定的変化に、「話したくないと思う」ことが否定的変化には関わることがあきらかになった。すなわち、ここでもサポートを受けた(聞いてもらった)かどうかは重要なのではなく、そうしたいと思うかどうか心理的变化にかかっているのである。結果として「告白」を通じて、心が癒されるにしろ、そうした相互作用を求める気持ちが、肯定的変化の準備状態として重要であることが示されている。では、聞いてほしいと思ったり、話したくないと思ったりという違いは、どのようにして生ずるのであるのか。失恋にいたる先行条件や関係崩壊のプロセス、さらには第三者との関係のあり方も影響を与える要因として検討の必要がある。この点も今後の課題である。

失恋後の心理的变化の方向に影響を与える要因について検討を加えてきたが、一部の先行要因、関係の崩壊過程の経験、失恋後の第三者との関係など、多様な要因がかかっていることがあきらかになった。それらの諸要因の相互関係や、中核となる要因があるのかどうかについての検討も、今後の課題としておきたい。

引用文献

- 大坊郁夫 1988 異性間の関係崩壊についての認知的研究
日本社会心理学会第29回大会発表論文集, 64-65.
- Duck, S. 1982 A perspective on the repair of personal relationships: Repair of what, when? In S. W. Duck (ed.), *Personal relationships 5: Repairing personal relations*, pp.163-184. London: Academic Press.

- Harvey, J. 1995 *Odyssey of the heart: The search for closeness, intimacy, and love*. New York: Freeman. (和田実(訳編) 1998 こころのオデッセイ - 人と人との親しさ・親密さ・愛を尋ねる社会心理学 川島書店)
- 石本奈都美・今川民雄 2001 青年期における失恋後の立ち直り過程 対人社会心理学研究, 1,119-131.
- 丸山利弥・今川民雄 2000 対人関係の悩みについての自己開示がストレス低減に及ぼす影響 対人社会心理学研究, 1, 107-118.
- 丸山利弥・今川民雄 2000 自己開示によるストレス低減効果の検討 対人社会心理学研究, 2,83-91.
- 宮下一博・臼井永和・内藤みゆき 1991 失恋経験が青年に及ぼす影響 千葉大学教育学部研究紀要, 39, 117-126.
- 沖田英治 1996 若者の自殺について - マスコミの誘発効果 富山大学人文学部人文学科卒業論文・修士論文ライブラリ <http://jinbun1.hmt.toyama-u.ac.jp/socio/lab/sotsuron/sotsuidx.html>
- Sprecher, S. & Fehr, B. 1998 The dissolution of close relationships. On J. H. Harvey (Ed.), *Perspectives on loss: A sourcebook*, pp.99-112. Philadelphia, PA: Taylor and Francis.
- 和田実 2000 大学生の恋愛関係崩壊時の対処行動と感情及び関係崩壊後の行動的反応 - 性差と恋愛関係進展度からの検討 - 実験社会心理学研究, 40,38-49.

註

- 1) 本研究は北海道教育大学大学院教育学研究科に 2001 年度に提出された修士論文の一部を加筆修正したものである。
- 2) 本研究の一部は、日本社会心理学会第 43 回大会において発表された。

Some effects on psychological changes after the dissolution of romantic relationship in adolescence

Natsumi ISHIMOTO (*Aikawa Hospital*)

Tamio IMAGAWA (*Hokusei Gakuen University*)

A questionnaire was administered to examine the effects of three kinds of factors on the psychological change experienced after dissolution of romantic relationship in adolescence. The factors taken up in this study were based on the proposals mentioned by Harvey(1995). Data from 196 of 352 students, who had experienced the dissolution of romantic relationship, were analyzed. Results indicated that Ss who couldn't explain the cause of dissolution experienced more negative psychological changes than could. But Ss, who experienced the 4 stages of Duck's Model of dissolution(1982), were more positive in psychological change than who didn't. Though supports offered by their friends did not relate to the psychological change, Ss who wanted to disclose their experiences of the dissolution of relationship to their friends indicated positive changes and those who didn't showed negative changes.

Keyword: romantic relationship, dissolution of relationship, adolescence, psychological change